



EL SALVADOR

学校名：市原中央高等学校

氏名：野田 政樹

〔担当教科：地歴公民〕

- 実践教科等：政治経済
- 時間数：3時間
- 対象生徒：高校3年生
- 対象人数：16人

〔1〕単元名

南北問題と日本の国際貢献

〔2〕単元の目的/目標（ESDの能力・態度）

- ・南北問題及び国際貢献に対する理解を深め、興味・関心を持たせる。（批判的思考力、多面的・総合的な考え方）
- ・異文化を理解しようとする態度を育てる。
- ・グループワークの中で、コミュニケーションを行う力や他者と協力する態度を育てる。
- ・誰かのために働くことの意義ややりがいについて考えることで、自分の将来に対する視野を広げると同時に、そのために必要な努力をする意欲を高める。（未来を予測し計画を立てる力、他者と協力する態度、進んで参加する態度）

〔3〕ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性
公平性	連携性	責任性

- ・先進国と開発途上国（日本とエルサルバドル）の違いに気づく。【多様性】
- ・開発途上国の問題には、経済・政治・歴史・文化など様々な要因が絡まり合っていることに気づく。【相互性】
- ・先進国が開発途上国にどのように関わってきたか、どのように関わっていくべきかを考える。【相互性、連携性、責任性】

〔4〕単元の構成

時間	本時のねらい、テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の観点と方法
1	【南北問題とは何か】	<ul style="list-style-type: none"> ・南北問題クイズ(開発途上国の状況を知る) ・JICAの活動内容を知る ・エルサルバドルのフォトムービーを見る ・南北問題の要因(先進国と開発途上国の違い)をグループで話し合う ・エルサルバドルクイズ(エルサルバドルの事例から、開発途上国の抱えている問題を知る) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内容を示した学習プリント ・パワーポイント ・フォトムービー 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動の観察 ・話し合いへの参加態度や発表内容
2	【国際支援とは何か】	<ul style="list-style-type: none"> ・国際社会の支援の歴史と日本の支援の現状を知る ・自分がJICAの一員だったら、支援の現場でどのような行動をするかをグループで話し合う ・エルサルバドル等の事例から支援とは何かを考える ・青年海外協力隊の方のインタビューを見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習プリント ・パワーポイント ・青年海外協力隊の方のインタビュービデオ 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動の観察 ・話し合いへの参加態度や発表内容 ・授業後の感想の確認

3	【南南問題とは何か】	・南南問題について知る ・単元の問題演習を行う。 ・アメリカ人旅行者とメキシコ人漁師の話を読む	・学習ノート(通年使用しているもの) ・参考プリント	・学習活動の観察 ・問題演習における解答の確認
---	------------	---	-------------------------------	----------------------------

【5】授業の詳細

1 時限目:【南北問題とは何か】

まず、パワーポイントを用いて南北問題に関するクイズを行い、開発途上国の現状を具体的にイメージさせることを導入とした。

- 例1 世界の約150か国、全人口(68億人)の8割が開発途上国に暮らしている。
 例2 学校にいけない子どもが1億3000万人いる。
 例3 1日1ドル以下で生活する人の数は11億人。
 例4 最貧国で5歳までに死んでしまう子どもの数は1000人のうち164人。

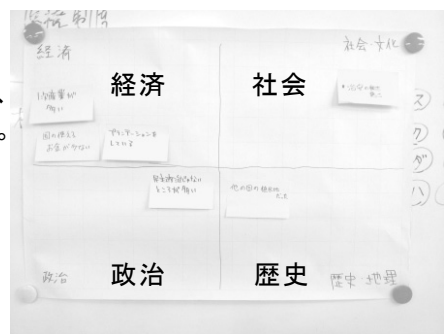
クイズ後、JICAの教師海外研修に参加し、エルサルバドルにいったことを伝え、エルサルバドルの話をしなが南北問題について考えるという授業の趣旨を説明。(10分)

生徒にはJICAについて知らない者もいるので、JICAの活動について簡単に説明。そして、エルサルバドルという開発途上国や現地で日本(人)がどのような活動をしているのかを知ることが研修の目的であったことを伝え、その上で、研修の様子を具体的にイメージさせ、かつ生徒の興味・関心を高めることを目的に、現地で撮影した写真をスライドショーでみることができるフォトムービーを流した。(10分)

次に、南北問題の要因について考えようと問題を提起し、そのために、開発途上国はなぜ、開発途上国なのか。先進国と開発途上国との違いは何なのか、生徒を4つのグループに分け、グループごとに意見を出させて発表させた。(15分)

具体的方法

- ① 各グループに模造紙とマジック、大きめの付箋を配付。
- ② 模造紙を4つに分割させ、左上を「経済」、左下を「政治」、右上を「社会・文化」、右下を「地理・歴史」の項目に設定。
- ③ 各項目について、グループ員は自分が思いついたことを付箋に書いて、模造紙に貼るように指示。
- ④ 5分程度で作業。
- ⑤ 各グループ1名にどのような意見が出たかを発表させ、私自身が前の黒板を用いて、項目ごとにまとめた。



開発途上国の一例として、エルサルバドルの事例を、クイズを行いながら説明した。(15分)

- Q 「Tengo amber?」は何語か? A スペイン語 → スペインの植民地であった【歴史】
 Q この植物は何か? A コーヒー → プランテーションとモノカルチャー経済【経済】
 Q 500という数字は何を示すか? A 平均月収(ドル)
 → 産業が未発達で市場も小さい【経済】
 → 80年代の内戦の影響【歴史・政治】
 Q 80/100000は何を示すか? A 殺人死亡率(年間)
 → 治安の悪さが外国資本の流入を阻害【社会・政治・経済】
 Q 622万と195万は何を示すか? A 総人口とアメリカに出稼ぎに行く人口
 → アメリカへの依存と志向【経済、文化】



ライフルを持つ
ガードマン(上)

植民地だった、紛争が絶えない、治安が悪い、産業が発展していない、輸出品が少ない、賃金が安いなど、生徒の意見と、私の示したエルサルバドルの事例で重なっている部分を確認したあと、結局のところ、「南北問題の要因は一つではなく、政治や経済、社会や歴史など、様々な要因が複雑に絡まり合っている」ということをまとめとして、授業を終えた。

ココがポイント！

- ・時間が限られていたため、授業が始まる前、着席時にグループ分けを行った。
- ・先進国と開発途上国の違いを考えさせるときに、意見を出しやすいように、政治・経済・社会・文化・地理・歴史という着眼点を設定した。
- ・意見が出しやすいように、思いついたものは迷わず書き、グループで数を競うよう働きかけた。

2 時限目：【国際支援を考える】

まず、パワーポイントを用いて、南北問題に対して、先進国がどのように対応してきたのかを説明。先具体的には、IDA(国際開発協会)やDAC(開発援助委員会)といった国際機関やGNI(国民総所得)比0.7%という政府開発援助の目標額などを説明した。その上で、日本の援助額が近年低下してきていることや、GNI比の目標に達していない現状を、クイズを交えて説明した。

この時点で、「資金協力の拡充」が、日本の国際支援の課題の一つとなっていることを確認する。その上で、本当にそれが最も大切なことなのか、そもそも「支援」とは何なのかを考えてみたいという、本時の問題提起を行った。(10分)

支援とは何かを考えるにあたり、国際支援の現場で想定された4つのケース(事例)について、もし自分がJICAの一員だったら、どのような判断・行動をするかをグループごとに話し合わせた。(30分)

具体的方法

- ① 4つのケース(事例)は、エルサルバドルにいて私が生徒に伝えたいと思ったことや、青年海外協力隊の方々へのインタビューなどを活用できるように作成した。
※ 話し合いの段階では、生徒には伝えていない。
- ② 4つのケースは、それぞれ封筒に入れて、生徒にひかせた。ゲーム感覚で1グループ1つに割りふった(右写真)。
- ③ 話し合いは5分程度で実施。
- ④ 話し合い後、他のグループがどのようなケースだったかわかるように、一覧にしたプリントを配付。また、それらが、エルサルバドルにおける体験やインタビューを参考にして作成したことを伝える。
- ⑤ 各グループ1名に、話し合った結果を発表させながら、私がエルサルバドルで感じたことや考えたことを、青年海外協力隊の方々へのインタビューなどを見せながら伝えた。



ケース1 あなたはJICAの職員で、現地からの要請を吟味し、予算をとまなう支援を決定できる立場である。開発途上国の役人から、工業高校の指導のために、日本で使用されている最先端の工作機械を供与してくれないかという要請があった。工作機械をいければ、生徒の意欲も向上し、知識や技能も向上するだろうとの話であるが、決して安いものではない。あなたは工作機械を供与しますか。

◆ 生徒の答え 供与する。理由は、高くてもそれがその国の技術の向上に役立つはずだから。

◇ 授業展開1 工業高校にあった日本の工作機械の写真(左)

→ 故障後、修理もできず何年も放置されている。

貝類養殖プロジェクト(中)における可児JICA専門家の話

→ 簡単な資材を用いて、現地の人と現地に合った方法を考えていた。(右)

→ 支援とは、相手のことを考え、「持続可能」なものでなければならない。



修理されずに放置されている機械



- ◇ 授業展開2 ラウニオン高等技術学院 青年海外協力隊・千村隊員のインタビュー
- インタビュー中でできたエルサルバドルの環境に対する意識の低さに言及。
 - 昔、果物はそのまま食べ、皮はそのまま捨てても大丈夫だった(左)
先進国がビニールという便利なものを持ち込んだが、処理は教えなかった。(中)
その結果、ポイ捨てされたビニールがそのまま道路に。
 - 支援とは、便利さだけではなくマイナスの面も伝える責任がある。(右)



ケース2 あなたは青年海外協力隊の一員で、現地のユースクラブ(村の青少年900人が登録する任意の団体)で開催するユースキャンプで参加者におそろいのTシャツを作成するかどうか迷っている。物品を配ることで(Tシャツ目当てで)参加者は増えるが、今後も物品を期待されることにならないか。物品が貰えないと参加しない、という現地の習慣を変えるために、プログラムを魅力的なものにする等の代替案が考えられないか。あなたはどうしますか。

- ◆ 生徒の答え Tシャツを配る。理由は、まずは参加してもらうことが大切だと考えたから。
- ◇ 授業展開3 実は、この事例はエルサルバドルのものではなく、授業を見学しに来ていただいていた元青年海外協力隊の方の実例だったので、その方に直接、その時どうしたかを生徒に話していただいた。
- Tシャツは配ったが、プロジェクト名を入れたり、全日程に参加した人のみに渡すといった工夫をしたとのこと。現地の方も喜んでくれたのでやって良かったと思うが、物品を配ったことで、次に赴任された方が苦勞されているとも聞き、複雑な心境。

(ケース3・4は省略)

結局、支援とはお金や物を与えることではなく、「相手のことを知り、相手のことを考え、相手と共に歩くこと」ではないかという私なりの考えを提示し、「支援とは何か」のまとめとした。

最後に、青年海外協力隊の方々からいただいた「生徒へのメッセージ」を流した。各隊員は、挑戦することの大切さ(遠藤隊員)や、好きなことをやることの楽しさ(伊藤隊員)、世界や自分の苦手なことへ一歩踏み出して欲しい(千村隊員)など、生徒に「生き方」を考えさせるような素敵なメッセージだった。

ビデオを終了後、エルサルバドルの研修を通しての感想として、現地で活動していた日本人の方々から本当に輝いてみえたことを伝えた。また、その輝きは、「自分のやりたいこと」をやっているからではないか、「誰かのために」働いているからではないかと、「挑戦している」からではないかと、私なりの考えを提示させてもらい、12月が終わると登校しなくなる3年生への饞の言葉にさせてもらった。(10分)

.....
ココがポイント!

 ・話し合いの結果について、正答はないことを伝える。隊員の方々の話はするが、正答というよりも、試行錯誤しながら取り組まれていることの方が大切。
 ・プリントにメモ欄を設け、インタビューメモや感想を記入できるよう指示しておき、授業後に回収。

3時限目:【南南問題とは何か】

普段使用している学習ノートを用いて、これまで学んだ南北問題についての重要事項を確認した。その後、南南問題について説明。説明後、学習ノートの演習問題に取り組みせ、答え合わせを行った。

最後に、インターネット上にある文章で、出典は不明だが有名な『メキシコ人漁師とアメリカ人旅行者の話』を紹介した。漁師が億万長者になれるよう、お金儲けのアドバイスをする旅行者であるが、億万長者の生活として、旅行者が示した生活は、漁師のように好きなことをして楽しむ、ゆったりとした生活だったという内容である。解釈は様々あるが、億万長者になることを望んでいない漁師に、旅行者は独りよがりのアドバイスをしている姿が滑稽に映る。幸せの価値基準は人それぞれで、まずは相手のことを知ることが大切であると、前回の授業の内容を再確認し、南北問題についての学習の終わりとした。

[6]児童・生徒の反応/変化

■ 1時限目の話し合いで出された意見のまとめ

- 開発途上国の経済発展が遅れている理由は何なのだろうか。

先進国と開発途上国の違いは何なのか皆で考えてみよう。

エルサルバドルの場合

【各グループから出た意見のまとめ】

<p>経済</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業が発達していない ・特産物が少ない ・輸出品目が限られ利益が得られていない ・植民地だったため自由な経済政策ができなかった ・プランテーション ・ 1次産業 ・ 垂直的分業 ・労働者の賃金が安い ・物価が安い <p>政治</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国家(政府)が整っていない ・民主政治ではないところが多い ・独裁政治など 	<p>社会・文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育の環境が整っていない ・医療制度が整っていない ・治安が悪い <p>地理・歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通機関が少ない ・他国の植民地だった ・民族間(宗教など)の対立が激しい ・紛争が絶えない ・土壌開発が行われていない ・歴史が知られていない
--	---

→ 開発途上国の経済発展が遅れには 様々な要因が絡まり合っている

■ 2時限目の感想

- ・世界に出て、いろんなことを学んで、日本に伝えて行くことが大切なんだなって思った。いろんな方のインタビューをきいて、いろんな刺激を受けられて本当によかった。
- ・もっと自分にできるなにかがあると今日の授業で思えたので将来、海外で活躍したいです。とても深く感動した授業でした！！
- ・最後のインタビューを聞き、今後の将来とにかくいろいろな新しいことに挑戦してみようと思いました。
- ・自分にできることは何か深く考えました。すごく心を動かされました。「援助は人と人との関係である」を胸にきざんでいきたいです。たくさんの方が様々なやり方で活躍していて、同じ日本人であることに誇りを感じました。
- ・今日の授業で改めて私もボランティア活動に参加したいと思いました。私は看護婦の資格を取りたいと思っていますが、病院である程度働いて経験を積んだら、それを活かして、協力隊に入って、誰かの力になれるような人生にしたいです！

■ 後日、「政治経済」の授業についての感想

- ・最後のエルサルバドルの授業は本当に良い刺激になりました。授業後もMさんとずっと「良い授業だったね！」と浸っていました。私も、グローバルな人間になるのが将来の目標なので、あんな授業を受けられて本当に良かったです。
- ・エルサルバドルの授業が強く印象に残っています。私は大学で国際系の学部に進みますが、ぜひボランティア等を探して現地を訪れようと考えています。

[7]授業実践の成果と課題

授業実践を自己評価するのであれば70点というところである。頭の中を整理できず、実質的な準備が遅くなってしまう、教材や話の展開など万全の準備をすることができなかった。その分、乱雑であった。しかし、満足感もある。エルサルバドルの紹介で終わらせないこと。ワークショップを2回入れ、そのうち1回は「クロスロード」のような要素を取り入れること。一生懸命にインタビューに答えてくれた隊員の方々のメッセージを活かすこと。生徒に自身の将来や生き方について考えさせること。そして、生徒に楽しかったといわれるような授業にすることなど、「やりたい」と思っていたことは、限られた時間の中では最大限やることができた。また、授業の感想を読むと、青年海外協力隊に参加したいなど、想像以上に国際協力や世界に関心を示していることに驚いた。隊員の方々のメッセージの力だと思うが、私自身、教師という職業の影響や使命感、やりがいを改めて感じる事ができた。

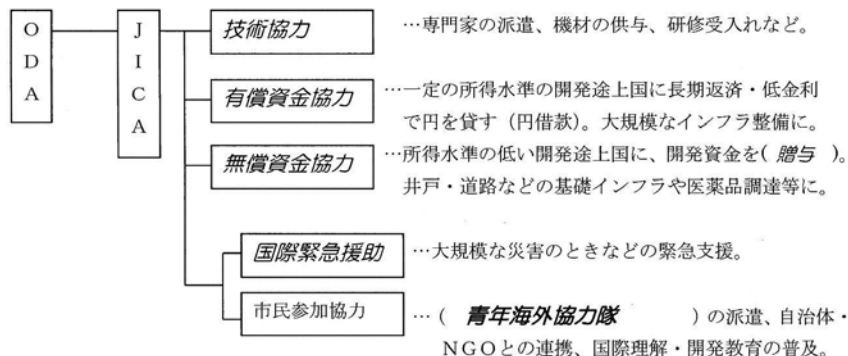
〔8〕参考文献(引用文献・参考資料)

- 『どうなってるの？世界と日本』独立行政法人 国際協力機構 広報室(2012年)
- 『JICA PROFILE』独立行政法人 国際協力機構(2012年)
- 『高等学校 現代政治・経済 改訂版』中村研一ほか 清水書院(2013年)
- 『最新図説 政経』浜島書店(2013年)
- 『メキシコ人漁師とアメリカ人旅行者の話』(出典不明)
- 「クロスロード(内閣府)」(<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/torikumi/kth19005.html>)

〔9〕使用教材(写真／図などの実物)

添付1 学習プリント(一部) ※ 斜体は板書事項

- JICA (= **国際協力機構**) は、(**政府開発援助** = **ODA**) の実施機関。



添付2 パワーポイント(一部)



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6

〔10〕教師海外研修を終えて(感想・今後の展望)

「やりたいことがない、挑戦したくない、大人になりたくない」という言葉を生徒たちからよく聞くようになった。そんな生徒たちに、誰かのためになる活動がしたいと、国際協力の現場に挑戦している青年海外協力隊の方々の姿を伝えたい。輝いている大人の姿を伝えたいと考えたことが、私が教師海外研修に参加した理由の一つであった。実際に、現地に行くと、国際協力の現場は想像以上に奥が深く、活躍されている方々から得られる言葉の一つ一つに感銘を受けると同時に、私自身が沢山の元気をいただいた。授業実践では、研修で私が感じたものをそのまま生徒に投げることを考えた。生徒たちの明るい表情と澄んだ目を見る限り、生徒の心に大なり小なり届けることができたように思う。今回の研修を通して、またこの仕事が楽しくなった。また、授業を見に来てくれた新人教師が「自分も行きたくくなりました」とポツリ。ここにも、私が研修に参加した意味があったのかもしれない。